瞿佑著作考

李　　慶

『剪灯新話』の作者瞿佑は中国の元末から明初に有名な学者である。時代の迢遞によって，彼の作品はほとんど失われてしまった。瞿氏の著作について，近年，日本では学者たちがいくらか研究したが，まだいっそう研究の余地があると思われる。一方，中国では，筆者の管見の及ぶところ，ほとんど展開されていない。最近，筆者が『全明詩』の編集のために，多少瞿佑のことを研究した。それによって，歴代諸家の記録を探し，前賢の研究を踏まえて，瞿佑の著作を考証した。今，その結果を次に列して，これからの研究者たちの一助としたいと思う。

1　春秋貫珠

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記されている。この『後序』は日本の慶安元年（1648）十一月林正五郎が刊刻した『剪灯新話』にあり，今流行の標点本の中に収録されていない。

明の陳善などの編集した『萬暦杭州府志』，明の萬暦の黄汝亨の序がある『銭塘県志』などに記している。

『千頃堂書目』巻二「春秋類」に記している。

清代龔嘉儁などの編集された『光緒杭州府志』の巻八十六「芸文一」にも記している。

佚。

2　春秋捷音

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記されたが，他文献に記録されているものは管見にいらない。

佚。

3 詩経正葩

瞿佑『重校剪灯新話後序』に「『正葩掇英』」とする。

明の陳善などの編集した『萬歴杭州府志』，明の萬暦の黄汝亨の序がある『銭塘県志』などに記されたが，『銭塘県志』に「『詩経正葩』」とする。

『千頃堂書目』巻一「詩経類」にもう「『詩経正葩』」とする。

清の朱彝尊の『経義考』巻百十二に記されて，「佚」と言われた。

清代の龔嘉儁などの編集した『光緒杭州府志』の巻八十六「芸文一」に「王府長史銭塘瞿佑撰」と言った。

佚。

4 資治通鑑綱目集覧鐫誤

瞿佑『重校剪灯新話後序』に「『集覧鐫誤』」とする。

郎瑛の『七修類稿』に「『通鑑集覧鐫誤』」と記されて，当時まだあると言っている。

『千頃堂書目』巻五「史学類」に「『資治通鑑綱目集覧鐫誤』一巻」と記している。

清代の龔嘉儁などの編集した『光緒杭州府志』の巻八十七「芸文二」に「『資治通鑑綱目集覧鐫誤』三巻」とする。

佚。

5 閲史管見

瞿佑『重校剪灯新話後序』に「『管見摘編』」とする。

『千頃堂書目』巻五「史学類」に「『閲史管見』」と記している。

『光緒杭州府志』巻八十七「芸文二」の記載が『千頃堂書目』と同じである。

佚。

6 四時宜忌

『光緒杭州府志』巻八十七「芸文二」に記されて，「一巻」とする。

日本の東洋文庫に収蔵の明刻本の『趨居家必備・趨避』の中に収録されていて，作者は「瞿祐」とする。

『四庫全書総目提要』巻六十七「史部・時令類存目」に記されていて，その本はもとも

と「編修程晋芳」氏の蔵書であり，程氏は清代の有名な蔵書家である。彼はその本に「徵引雖博，究不免傷于蕪雜也」と言っている。

『学海類編』にも収録されていて，「一巻」とする。

台湾の『筆記小説大観』第六巻に影印されたが，作者を「元銭塘瞿祐宗吉」とする。

現存。

7　誠意斎課稿

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記されて，「治経（経学を研究）」の著作とする。

他の所には管見に入らないが，周定王の子周憲王朱有敦の号は「誠意斎」である。この事実を考えると，その本は瞿佑が周王府の長史の在任中，教授用のノートであると推測できる。

佚。

8　居家宜忌

明の陶いて氏が編集した『続説郛』三十に収録されて，作者は「銭塘瞿祐」とする。

清の黄秩模氏の編集した『遜敏堂叢書』にも収録された。又，『付録』，『続録』，『三続録』，『四続録』，『補録』もある。この叢書は日本の東洋文庫に収蔵されて，作者は「瞿祐」とされた。「祐」，「祐」と佑は一人であるはずであると。

『光緒杭州府志』巻八十八「芸文三」に「一券」と記されて，作者は「瞿佑」とされている。

現存。

9　俗事方

明代に刊刻された『居家必備・治生』に収録されて，今東洋文庫にこの本は収蔵されている。

又，『千頃堂書目』巻十四「李恒『袖珍方』四巻」条に周王が瞿佑に命じて，彼に『袖珍方』の『序』を書かせたという記事がある。たぶん，当時，瞿佑はその本の編集に参加した可能性がある。そのことについて，『千頃堂書目』の「『普済方』四百二十六巻」条，『四庫全書総目提要』「子部・医家類」及び丁丙『善本書室蔵書志』巻十六の『袖珍方』条などの記載が参考になる。

現存。

10 葬説

，『千頃堂書目』巻十三「五行類」に「『陳氏葬説』一巻」と記されており，「類書類」の「『広説郛』八十巻」条に瞿佑の「『陳氏墓説』」とある。この二つの本は同書異名であると思われる。

王鴻緒『明史稿芸文志』「五行類」，『明史芸文志』などに「『葬説』一巻」と記されている。

『光緒杭州府志』巻八十八「芸文三」の記載は『千頃堂書目』巻十三「五行類」と同じである。

佚。

11 宣和牌譜

『光緒杭州府志』巻八十八「芸文三」に記されて，『続説郛』に収録された。

現存。

12 学海遺珠

瞿佑『重校剪灯新話後序』では，「記事（事伴を記する）」の著作と言われていふ。

郎瑛の『七修類稿』の中にこの本を「不可復得」のものと言っている。たぶん，すでに亡佚の本と思われる。

佚。

13 大蔵捜奇

歴代の記載は『学海遺珠』と同じである。

佚。

14 遊芸録

瞿佑『重校剪灯新話後序』，郎瑛『七修類稿』の記載は大体『学海遺珠』，『大蔵捜奇』と同じである。

『千頃堂書目』巻十五「芸術類」「『遊芸録』」と記されて，同書巻三十二「文史類」にも

記され，「瞿佑」の作品と言っている。

又，『光緒杭州府志』巻八十九「芸文四」に，この本を「剪灯新話」条の下に付録されている。以上の記録者たちはたぶん，この本を見たことがなかったかもしれない，したがって，本の性質，内容も分からなかったと思われる。

佚。

15 剪灯新話（『剪灯録』，『秋香亭記』，『西閣寄梅記』などを含む）

瞿佑『重校剪灯新話後序』には少年の時，『剪灯録』というものを書いて，それは「記事」の作品であると言った。『剪灯録』についての詳しいことはまだ，はっきりしない。秋吉先生は『原「剪灯新話」の刊期』（1978年九州大学中国文学会の『中国文学論集』第7号）という論文の中で『剪灯新話』は『剪灯録』のもとで編成されたと推定された。もし，この推定が正しいとすれば，『剪灯録』は『剪灯新記』の原始資料の可能性がつよいと思われる。

郎瑛の『七修類稿』巻三十三に記されている。

明の高儒の『百川書志』巻六「史部小史類」に「『剪灯新話』四巻，付録一巻」と記されて，「古伝記之派也。托事興辞，共二十一段。但取其文彩詞華，非求其実也。」と言われている。

『千頃堂書目』巻十二「小説類」の「瞿佑『存斎類編』又『香台集』三巻」条下，次の注がある：

佑又有『剪灯余話』，正統七年癸酉李時勉請禁燬其書。故與李禎『余話』皆不録。

清呉騫の批校本『千頃堂書目』に校して云：

銭塘瞿宗吉著『剪灯新話』，多載鬼神淫褻之事。同時廬陵李昌期著『剪灯余話』続之。二書今盛行市井。予嘗聞周先生鼎云，『新話』非宗吉著。元末有富者某，家武林，楊廉夫（案，楊維禎）留旬日，劇為此作，将以遺主人也。宗吉少時為富人養婿，嘗侍廉夫，得其稿，遂掩為作，惟『秋香亭』一篇，乃其自筆。観『新話』之文，不類鉄崖，周先生之絳言，豈別有所本耶？

以上の意見は一説として，参考のこと。

『千頃堂書目』巻十五「司馬泰『文献匯編』一百巻」条の中にも『剪灯新話』を記して，「類書」と言っている。

銭謙益の『絳雲楼書目』巻二「『剪灯新話』，『余話』」と記された。注の中に

瞿祐著。字宗吉，銭塘人，少時受知於楊廉夫，明初為周王長史。『余話』乃永楽間李布政禎効瞿為之者也。李方伯以著『余話』，故歿後不得祀於郷賢。見『孤樹褒談』。

と言っている。　以上の記載から見れば『剪灯新話』という本は明末清初の時にとても人気のものであると思われる。　『剪灯新話』の刊刻の時期，中国，日本では『剪灯新話』

の流伝の状況について，拙文『瞿佑生平編年事輯』（台湾，中央研究院文哲所編『中国文哲研究通訊』1994年第4巻第2期），『瞿佑及其時代』（上海古籍出版社『中華文中論叢』第53期，1994年），内田道夫先生などの『中国小説の世界』（拙訳，上海古籍出版社1992年），周楞伽氏『校注剪灯新話・前言』（上海古籍出版社，1987年）及び前引した秋吉先生の論文などを参考のこと。

『秋香亭記』は近年刊行の『剪灯新話』の中に収録されている。

『西閣寄梅記』は『古今図書集成・閩媛典』に瞿佑の作品として収録された。明末の「詹詹外史」が編修した『古今情史類纂』にもこの『西閣寄梅記』を収録した。『西閣寄梅記』は又『寄梅記』と呼ばれた。

以上の作品は現存。

16 存斎類稿（『存斎遺稿』『存斎集』『存斎新話』などを含む）

瞿佑『重校剪灯新話後序』にこの本を「攻文（文学を研究）」の作品とする。

『千頃堂書目』巻十二「小説類」に記している。郎瑛の『七修類稿』巻三十三によると，当時瞿氏の後代は『存斎遺稿』を持っていると言う。それは『類稿』の残存の一部である可能性がある。それから『存斎集』と言われた本は『遺稿』の状況と似て，すなわち，ただ本来『類稿』の残存の一部であると思われる。

田汝成『西湖遊覧志余』に『存斎楽全集』という本を記しているがそれは瞿佑の著作を総括して呼んだものであろう。実は『存斎』と『楽全』は別々の本である。『存斎』は永楽六年に追放されるまえ作られたものであり，『楽全』は氏の八十歳以後の作品である。

『千頃堂書目』巻十五「類書類」に「『広説郛』八十巻」条の下「五十九巻」のところに「『存斎新話』瞿佑，『運甓子余説』李禎」という記録がある。『存斎新話』は『剪灯新話』であるはずだと思われる。

又，巻十八「別集類」に「『瞿佑宗吉集』四巻又『存斎楽全集』三巻」という記録がある。この『存斎楽全集』は現存の『楽全稿』の巻数と同じだから，当時記されたものは現存の『楽全稿』であるはずだと思われる。

朱彝尊の『明詩綜』に『存斎楽全集』も記されている。

王鴻緒『明史稿芸文志・四』「総集類」に「『存斎楽全集』三巻」と記されていて，『明史芸文志』の記録も同じである。たぶん以上の記録者たちも瞿氏の原本を見たことがないであろう。

『光緒杭州府志』の巻九十一「芸文五」にこの本の巻数を「二巻」と記していて「三巻」の誤りである可能性がつよい。

要するに，瞿氏前半生の著作集の『存斎類編』は氏の死後，ただ一部の遺稿が残って，

この遺稿は『楽全集』と一緒に刊行されたのかどうかは，まだわからない，しかし，現存の記載によると，清代以来記された『斎楽全集』というものは現存の『全楽稿』であると思われる。

佚。

17 採芹稿

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記されて，「作詩」の作品といわれている。

佚。

18 名賢文粋

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記されて，「攻文」の作品といわれている。

『千頃堂書目』巻三十一「総集類」に記されているが，しかし巻数の記載がない。『光緒杭州府志』の巻九十五「芸文十」に記されものは『千頃堂書目』巻三十一「総集類」と同じである。この本も亡佚。

佚。

19 鼓吹続音

瞿佑『重校剪灯新話後序』，また『帰田詩話』巻上「鼓吹続音」条，および巻下「梧竹軒」条のなかに記されている。それらの記録によると『鼓吹続音』は「至正20年」ごろ，すでに亡佚したようである。『千頃堂書目』巻三十一「総集類」に「瞿佑『鼓吹続音』」という記録がある，おそらく書名だけを記していて，原本を見たことがないと思われる。

佚。

20 風木遺音

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記して，「作詩」の作品としている。他のところは記載がないそうだ。

佚。

21 楽府擬題

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記されている。また『帰田詩話』巻下「還珠吟」条に「瞿佑少年のとき，擬楽府の百首を作られた」という記録がある。この本は瞿氏少年のときの作品であり，すでに亡佚したものと思われる。

佚。

22 屏山佳趣

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記して，「作詩」の作品と言っている。

郎瑛の『七修類稿』巻三十三に記して，当時はまだ存在していると言った。

『光緒杭州府志』の巻九十一芸文五に「屏山雅趣」と記して，すでに亡佚したという。

佚。

23 興観詩

郎瑛の『七修類稿』巻三十三に記して，当時まだ存在していると言っている。

『千頃堂書目』巻三十一「総集類」に「仇遠瞿佑『興観集』一巻」という記録がある。

『光緒杭州府志』の巻九十一「芸文五」に「『興観詩』」と記されている。

佚。

24 順承稿

郎瑛の『七修類稿』巻三十三に記して，当時まだ存在していると言っている。

『光緒杭州府志』の巻九十一「芸文」五に「『順存稿』」と記して，この本も亡佚したと言っている。

佚。

25 天机雲錦（一作「『玉机雲錦』」）

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記して，「填詞」の作品と言っている。

郎瑛の『七修類稿』巻三十三に「玉机雲錦」と記されて，「已不可復得」と言っている。

佚。

26 香台集（一作『香奩集』。『香台百詠』，『香台新詠』を含む。）

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記している。

郎瑛の『七修類稿』巻三十三にこの本は当時まだ存在していると言って，又同書巻三十一「徐伯齢」の条に徐氏がン香台集注』三巻を作ったと言っている。又，同書の巻六『香台百詠』の条下に「『香台詩集』，吾杭国初瞿宗吉所作，擬『玉台』，『香奩』，各取一字以為之名，曰『初』曰『続』，曰『新』」と記している。郎氏は『香台集』の原稿を手に入れたことがあると言っている。

徐伯齢の『蟫精雋』巻十五に『香台集序』を収録して，その『序』に「先正瞿存斎先生宗吉嘗詠女故事三百絶，取名『香台集』，前百首為『香台百詠』，次百首名『続詠』，又百首為『新詠』と言っている。

以上の記録によると，この本は原来，三百首があり，そして『百詠』，『続詠』，『新詠』の三つの部分に分けられているということがわかる。

明の高儒の『百川書志』「史部・伝記類」「『香台集』三巻」の条下に「皇明銭塘存斎瞿佑宗吉箸。纂言記事得百一十題。事関閨閣，辞切勧懲，仍以本事附於題後，傍注係於詩下，資人吟詠之趣，而広見聞之方，庶幾詠史之作也。」と言う注がある。

明晁瑮『晁氏宝文堂書目』の「子部雑家類」に記している。

明趙用賢『趙定宇書目』の「佛書類」に「『香台集』一本」と記している。

以上の記録によると，明の末ごろ，この本はわずか百首ぐらいしか残っていなかったと思われる。

『千頃堂書目』巻十二「子部小説類」に「『香台集』三巻」，又「集部・永楽朝」に「『香台集』三巻」，又「『香台百詠』」と記している。

『明史稿芸文志』及び『明史芸文志の「子部小説類」にどもに「『香台集』三巻」と記している。

朱彝尊の『明詩綜』，陳田の『明詩紀事』の瞿佑条下に「『香台百詠』」と記している。

『光緒杭州府志』の巻九十一芸文五に「『香台百詠』三巻」があり，又，「『香台集』」，「『香台続詠』」，「『香台新詠』」と記している。たぶん原本を見ずに，ほかの書目から転写したものであろう。だから重複している。

この本は旧北平図書館が一冊の明代の写本を，一時にアメリカの国会図書館に預けたこともあり，それはいま台湾の故宮博物館に収蔵されている。日本の東洋文庫にこの本のマイクロ・フィルムがある。

この本について王重民先生の『中国善本書目』の「集部詞部」に記して，次のように言っている：

此本取古来仕女百二十人，人為楽府一首，先著其出処，又庶詩中故事，附注於後。疑並佑一人為，其注非後人所加。『千頃堂書目』既載『香台集』三巻，又載『香台百詠』一巻，殆是集原為百首，後増益二十首，分為三巻，此当是最後定本也。

原為百首，後増益二十首，分為三巻，此当是最後定本也。

という見方は以上歴代の記録と比べてみれば間違いであると言わざる得ない。王重民先生の調査には不備があると思われる。

筆者の憶測によると，現存の詩注は徐伯齢氏が作った物だと思われる。そして，この百二十首は最後の定本ではなく，三百首のなかの残りであると思われる。

部分現存。

27 詠物詩（又作『詠物新題詩集』）

郎瑛の『七修類稿』巻三十三にこの本を記して，当時まだ存在していると言っている。

『千頃堂書目』巻三十一総集類に「謝宗可瞿佑朱之蕃『詠物詩』六巻」と記している。又巻十八別集類に「『存斎詠物詩』一巻」という記録もある。

『光緒杭州府志』の巻九十一「芸文五」に「『存斎詠物詩』一巻」と記している。

この本は日本の内閣文庫に宝永七年（1710）の刊本一冊．収蔵されている。その本の前に「正統九年甲子夏四月望日，賜進士翰林院修撰儒林郎姑蘇張益」の『序』がある。又，「宣徳己酉八月上澣」瞿佑の『自序』もある。『自序』の中に

謫少日見謝宗可『詠物詩』愛之，因効其体……被謫以来，原稿久已失去，留滞山後，追憶旧章，得其全者四十首，書附吟稿，以備遺志……及回南京，又於郷友董以識処，得其所伝三十首，今至松江，居閑事簡，復制三十首，以足百篇之数……

と言っている。この『自序』によって現存の『詠物詩』は瞿氏が晩年に旧稿を収集して，作ったものであると思われる。

この本は光緒年間刊行された『武林往哲遺事』の中に収録されている。

現存。

28 楽府遺音（又作『楽府余音』）

郎瑛の『七修類稿』巻三十三に当時現存のものとして記している。

『千頃堂書目』巻三十二「詞曲類」に「『楽府余音』二巻」がある。

『四庫全書総目提要』巻二百「集部詞曲類存目」に「『楽府遺音』五巻」，「浙江汪啓淑家蔵本」であると記している。あの記載によると，「是集自巻一至巻二，皆古楽府，自巻三至巻五，皆詞曲。」楽府の部分はただ二巻である。したがって，『千頃堂書目』の記録は間違

いではないと思われる。

『光緒杭州府志』の巻九十五「芸文十」に「『楽府遺音』五巻」と記している，たぶん『四庫全書総目提要』から写したものであろう。

この本は上海大東書局が刊行したものもあり，そして，北京図書館に明代の写本瞿佑『楽府遺音』一巻として収蔵されているものもある。まだ未見。

中国の復旦大学図書館に「戊辰重三日高梧軒」の『跋』がある『楽府遺音』刊本一冊を収蔵されている。その本は昔丁丙氏所蔵の写本によって刊行されたものであり，本の末の丁丙氏の跋によると，「明影鈔天順七年刊本」から「傳録」されたものである。この本は最近，上海古籍出版社が影印された『明詞匯刊』の中に収録された。

その本の中にもっとも注意すべきところは瞿佑の生年月日を考証できる資料である。瞿氏の生年について拙文『瞿佑生平編年事輯』などにすでに論じて，ここでさらに瞿佑誕生の月日を検討したいと思う。その本に『桂枝香・初度日用前韻自寿』という詞がある。詞の中に「問題度桃花，今在何許？明日中元，猶記宋賢詩記」という文句の意味からみれば，瞿佑誕生の月日は中元の前の日はずである。そして，『水調歌頭・乙未初度日自寿』という詞もあり，詞の中に「明日中元到，不覚迂生辰」と言って，もう一度前文の判断を証明できると思われる。

現存。

29　余清曲譜（又作『余清詞集』）

瞿佑『重校剪灯新話後序』に記されて，「填詞則有『余清曲譜』」と言っている。この材料によって，『余清曲譜』と『余清詞集』は同じものだと判断できるであろう。

郎瑛の『七修類稿』巻三十三に当時現存のものとして記している。

『千頃堂書目』巻三十二「詞曲類」に「『余清詞』一巻」と記している。

『明史稿芸文志・四』「総集類」に「『詞』三巻」と記している。

『明史芸文志・四』「別集類」にも「『詞』三巻」と記している。

たぶん瞿佑に詞の作品は後世にまとめられて，三巻になったのであろう。この三巻の詞は又，『楽府余音』二巻とあわせて五巻になった。前に引用した『四庫全書総目』の『楽府遺音』条の「提要」を読むと，以上のことが分かると思われる。

『光緒杭州府志』の巻九十五「芸文十」に『余清詞集』一巻と記しているが，たぶん他の記載から写されたものであろう。

部分現存。

30 帰田詩話（『存斎詩話』『吟堂詩話』を含む）

郎瑛の『七修類稿』巻三十三に当時現存のものとして記している。

「明弘治庚申冬賜進士銭處胡道氏」の『存斎詩話小序』に

銭塘存斎瞿先生宗吉在国初時著詩話三巻……特其名号，近於訂頑乏愚，起争端之謂，不若直謂之『存斎詩話』也。

と言った。この『存斎詩話小序』は今の『帰田詩話』の前に載せられている。その記事によると，『存斎詩話』は『帰田詩話』とおなじのものであるはずだと推定することができる。

『四庫全書総目』巻一九七「集部・詩文評類」の存目の中に「『帰田詩話』三巻」と記していて

殆創稿於保安，帰乃成帙歟。後宏（弘）治中，廬陵陳叙刻之。以佑別号存斎，易名『存斎詩話』，無所取義。今仍題『帰田詩話』，従佑所自名也』

と言った。二つの実は同書異名であると証明された。

北京図書館『古籍善本書目』「集部・詩文評類」に「『帰田詩話』三巻」と記されていて，それらは明刻体，および清の曹炎の刻本である。，又「『存斎詩話』一巻」と記されていて，それは明の写本である。この本は『帰田詩話』と同じのものかどうか，比べて見ればすぐ分かるはずであるが，現実の条件をかぎりまだ比べていない。しかし，同じのものであろうと思われる。

銭謙益の『絳雲楼書目』巻四に『吟堂詩話』，又『帰田詩話』と記している。

『千頃堂書目』巻三十二「文史類」に「『吟堂詩話』三巻，又『帰田詩話』三巻」と記している。

『明史稿芸文志・四』，及び『明史芸文志・四』の「文史類」には，ともに「『吟堂詩話』三巻」だけ記している，『帰田詩話』は記していない。

『四庫全書総目』の記載状況は前文にすでに述べた。

康熙乙亥年間に刊刻した『河南府志』巻十五「名宦類」に瞿氏の伝記を載せ，彼が『帰田詩話』を作ったと言っている。

『光緒杭州府志』の巻九十五「芸文」十に『存斎帰田詩話』三巻」と記している。

呉景旭の『歴代詩話』，鮑氏『知不足斎』及びの『龍威秘書』『古今説部』など叢書の中ではすべて「三巻」の『帰田詩話』が収録されている。しかし，『続説郛』の中には「一巻」である。

以上の歴代記載，現存の刊本および瞿氏の伝記資料によると彼が書いた「詩話」は三巻だけであろう。そうすると『吟堂詩話』というものも『帰田詩話』と同じ本であると思われる。

現存。

31 楽全稿（『楽全詩集』，『楽全続集』，『東遊詩』を含む）

郎瑛の『七修類稿』巻三十三には，瞿佑の『楽全稿』を当時現存のものとして記している。

『千頃堂書目』巻十八「別集類」に「『存斎楽全集』三巻」と記されて，『明詩綜』，『明史稿芸文志』，『明史芸文志』の記載と同じである。具体的なことは前の「16　存斎類稿」条を参照。

中国ではこの本は清朝の中期以来，すでに亡佚したらしい。最近，筆者は日本東京の内閣文庫で一冊の写本を見つけた。その本の内容，流伝の状況について拙文『瞿佑及其時代』（『瞿佑及び彼の時代——日本東京内閣文庫の「楽全稿」について』）という論文の中に詳しく論じている。参照していただければ，幸いである。

この本の前に「正統甲子歳五月既望，翰林院侍講承徳郎兼修国史彭城劉鉉」の『瞿先生楽全稿序』がある。「今曰楽全，勉以保全名行為楽」と言っている。又「宣徳三年歳在戊申陽月吉日八十二歳翁銭塘瞿佑」の『楽全詩序』もある。この部分の詩はその年に瞿氏が北京から南京に帰って，途中で作ったもので，併せて百二十首ある。

それにつづくのが『東遊詩』五十首である。翌年の四月二十六日から五月十日まで瞿氏が南京から松江に行く時に船の中で作ったものである。

その写本の最後に，『楽全続集』がある。正統五年に，瞿氏が松江から故郷の杭州に一時帰省したことがある。その時に作った詩であり，併せて八十首ある。

その写本の中に「佐伯候毛利高標字培松蔵書画之印」（篆書陽文方印），「浅草文庫」（篆書陽文長方印），「昌平坂学問所」（篆書陽文長方印）などの蔵書印がある。毛利高標氏（1755—1801）は当時佐伯藩（今の九州大分県）の第八代藩主，有名な中国古典の収蔵家であり，昌平坂学問所は江戸時代の官学であり，浅草文庫は今の内閣文庫の前身の一つである。以上の蔵書印によると，その写本ひ流伝の過程がはっきりになって，信頼できるものだと思われる。その写本は瞿佑の生平の研究に対しても，明初代初期の詩，および社会状況の研究に対しても，ともに重視すべき資料だと思われる。

現存。

附録：瞿佑詩文輯佚（略）